
研究報告 学校保健の視点から捉えた摂食障害に関する文献検討

Eating Disorders captured from the viewpoint of school health:a literature review

竹村佳那子 中下富子

Kanako TAKEMURA Tomiko NAKASHITA



東京医療保健大学
TOKYO HEALTHCARE UNIVERSITY

〈研究報告〉

学校保健の視点から捉えた摂食障害に関する文献検討

Eating Disorders captured from the viewpoint of school health:a literature review

竹村佳那子¹ 中下富子²

¹東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科 ²埼玉大学 教育学部

Kanako TAKEMURA¹, Tomiko NAKASHITA²

¹Division of Nursing, Faculty of Healthcare, Tokyo Healthcare University,

²Faculty of Education, Saitama University

要 旨：本研究の目的は、学校保健の視点から摂食障害に関する文献を検討し、学校における摂食障害の児童生徒等への支援について研究課題を明確にすることである。2012年5月医学中央雑誌WEB版により「摂食障害」「教育」「学校」をキーワードに原著論文の検索を行い、対象文献は発表年度、研究領域、研究デザインと内容について整理し分析した。その結果、学校には摂食障害の発症を未然に予防するための保健指導を行う役割と摂食障害の児童生徒等を早期発見し治療に結びつける役割が期待されていると考えられた。また、摂食障害の治療にあたっては学校生活への配慮が欠かせず、そのためには医師やカウンセラー等の専門職と学校との連携が重要となるが、学校における具体的な支援方法については十分に明らかにされていない現状が推察された。そこで学校と専門職との連携を重視した摂食障害の児童生徒等への具体的な支援を提示することが課題である。

キーワード：摂食障害、学校保健、文献検討

Keywords：eating disorders, school health, literature review

I はじめに

摂食障害は思春期に好発し、摂食障害を抱え学校に通っている児童生徒等も少なくない。保健室利用状況調査¹⁾では、「拒食や過食等の摂食障害に関する問題」を把握する学校が2006年の調査で中学校8.3%、高等学校63.1%であった。いずれも2001年の中学校6.0%、高等学校55.0%から増加しており、中学校から高等学校にかけて摂食障害に関する問題が急増している。摂食障害は多くが軽快と再発の起伏を伴う慢性的な経過を辿る疾患であり²⁾、児童生徒等が一日のうち長い時間を過ごす学校生活において継続した支援が必要であると考えられる。そこで摂食障害の先行研究について学校保健の視点から検討し、学校生活における摂食障害の児童生徒等への支援に関する研究課題を明確にする必要がある。

II 目的

学校保健の視点から摂食障害に関する文献を検討し、最近10年間に報告された研究結果を把握することで、学校における摂食障害の児童生徒等への支援について研究課題を明確にすることを本研究の目的とする。

III 方法

2012年5月、医学中央雑誌WEB版Ver.5により、2000年から2010年において「摂食障害」「教育」「学校」をキーワードに原著論文の検索を行った。対象文献は発表年度、研究領域、研究デザインと内容について整理し分析を行い、学校における摂食障害の児童生徒等の支援について今後の課題を考察した。

なお、本研究において「児童生徒等」とは、学校保健安全法に準じ学生も含むものとする。

Ⅳ 結果

検索の結果「摂食障害」「教育」237件、「摂食障害」「学校」101件、合わせて338件の文献が抽出された。このうち重複した文献を整理し、研究目的に合致する学会誌に掲載された原著論文53件を対象文献とした。

1. 文献数の推移と研究領域

文献数は2003年、2005年が8件で最も多かった。次いで2004年、2010年が6件、2002年、2008年が5件で

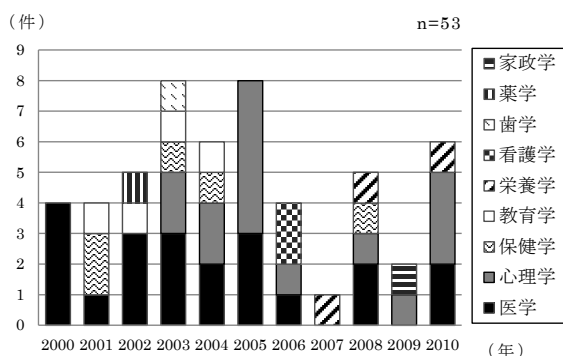


図1 文献数の推移と研究領域

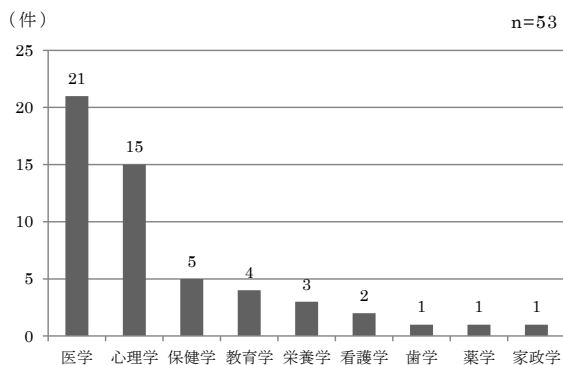


図2 研究領域と文献数

あった(図1)。研究領域は9領域挙げられ、医学21件(39.6%)、心理学15件(28.3%)、保健学5件(9.4%)、教育学4件(7.5%)、栄養学3件(5.7%)、看護学2件(3.8%)、歯学、薬学、家政学各1件(1.9%)の順であった(図2)。

2. 研究デザインと内容(表1)

対象文献53件を研究デザイン別に分類すると、量的分析42件(79.2%)、質的分析10件(18.9%)、量的分析と質的分析のミックス1件(1.9%)であった。

1) 量的分析による研究内容(表2)

量的分析による文献42件を研究内容の類似性に基づき分類すると〈関連要因の探究〉23件が最も多かった。次いで〈治療(指導)効果〉、〈スクリーニング〉5件、〈患者の症状・特性〉4件、〈予防的介入プログラムの開発〉、〈他国との比較〉2件、〈支援者への支援〉1件であった。

〈関連要因の探究〉では、摂食行動、ダイエット行動、ボディイメージについて検討する文献が多く見られたが、自己概念やセルフエスティーム等との関連について検討する文献も複数見られた。岸川ら¹⁸⁾は摂食障害とボディイメージはきわめて多様な側面をもち、自己概念とも相互に影響し合っていることを明らかにした。池田⁴⁰⁾は、自尊感情とやせ志向とは強い関連があることを明らかにし、更にやせ志向と自尊感情では自己の体型への否定感が強く関与していることを見出した。一方で個人の内面の要因に留まらず生活面の要因に関する検討を行った文献も見られた。小澤ら³²⁾は女性誌の影響について検討し、被影響特性と痩身理想の内面化、自己像不満、痩せ願望が循環的に関係しており食行動異常に悪影響を及ぼすことを明らかにした。八田ら⁴⁶⁾は摂食障害傾向をもつ女子高校生の日常

表1 対象文献の研究デザインと内容

		(n=53)		
研究デザイン	内 容	2000-2005	2006-2011	計
量的分析	関連要因の探究	12	11	23
	スクリーニング	4	1	5
	治療(指導)効果	4	1	5
	患者の症状・特性	3	1	4
	予防的介入プログラムの開発	1	1	2
	他国との比較	2	0	2
	支援者への支援	0	1	1
質的分析	症例報告	7	1	8
	支援	1	1	2
ミックス	治療効果・症例報告	1	0	1

学校保健の視点から捉えた摂食障害に関する文献検討

行動の傾向と生活全体に対する満足感や体型満足感への自己評価について関連性を検討した。その結果、摂食障害傾向が高いと太っていると感じやすく、生活満足感が低く、それを外見の不満に帰属する傾向がある

ことと不健康な生活習慣があることが示された。年齢については、葦原ら²⁷⁾は中学生の時点で既に摂食障害を示すものが存在することを明らかにした。また、食行動異常に影響を与える要因に性差があることを明ら

表2 対象文献（量的分析）

					n=42
内容	筆頭著者(発表年)	掲載雑誌	研究対象者	検討内容等	
関連要因の探究	木村達志(2001)	学校保健研究42(6)	女子大学生	減量行動、生活習慣、体脂肪率との関係	
	石明英(2001)	心療内科5(6)	大学生	身体像(シルエット画、体型の自覚、体型と身体部位の満足度)と性差の検討	
	KajitaMiwako(2002)	Psychiatry and Clinical Neurosciences56(2)	大学生	特に痩せた学生(BMI)の自尊感情(HS)と大学生人格調査票(UPI)による検討	
	片山美香(2002)	思春期学20(4)	中学生、高校生、大学生	ボディイメージ形成の横断的検討(ボディイメージ質問紙調査)	
	NishizawaYoshiko(2003)	Psychiatry and Clinical Neurosciences57(2)	高校生	自己体型認識(シルエット画)と食行動(EAT-26)の関連	
	岸川雄介(2003)	心療内科7(4)	女子高校生	ボディイメージ(HABIT)、痩せ願望や摂食態度(EAT)、自己概念(テネシーの自己概念尺度)の関係	
	葦原摩耶子(2003)	日本健康教育学会誌11(2)	女子中学生	セルフエフィカシー(運動に関するSE、過食状況に関するSE)、食行動(EAT-20)、ダイエットのタイプの関連	
	葦原摩耶子(2004)	健康支援6(2)	中学生	食行動異常を予測する要因の検討 食行動異常(EAT-20)、精神的健康状態(GHQ-12)、社会的体格不安(社会的体格不安尺度)の関係	
	山島圭輔(2004)	女性心身医学9(3)	女子大学生	体格(BMI)、ボディイメージ(シルエット画)、食行動(EAT-26)の関係	
	小野久美子(2005)	心身医学45(7)	女子高校生	摂食障害傾向に影響を及ぼす要因の検討 身長、体重、理想の体重、月経周期、摂食障害傾向(EAT-26)、binge eating尺度、ダイエット行動尺度、日本版過食状況効力感尺度、抑制状況効力感尺度、アサーション行動チェックリスト、学生用ソーシャル・サポート尺度、ストレス対処方略(Triaxial Coping Scale-24)、不合理信念測定尺度(JIBT-20)の関係	
	小澤夏紀(2005)	心身医学45(7)	女子大学生	女性誌暴露が食行動異常に及ぼす影響 女性誌購読習慣、MAGINFO尺度、MODEL尺度、自己像不満尺度、やせ願望尺度、ダイエット行動尺度、食行動調査票(EAT-20)の関係	
	山島圭輔(2005)	女性心身医学10(3)	女子大学生	身体像不満感(身体像不満感測定尺度)、摂食態度(EAT-26)、自己意識保有傾向(自己意識測定尺度)の関連	
	小澤夏紀(2006)	心身医学46(2)	女子大学生	月経前不快気分障害(PMDD)の症状と抑うつ感、過食傾向の関係 PMDD研究用基準案(DSM-IV)に基づく質問紙検査、ツァン自己評価うつ病スケール(SDS)、Bulimic Inventory Test,Edinburgh (BITE)による回顧的調査、The Daily Record of Severity of Problems Form短縮版(DRSP-Short)、気分や体調に関するモニタリングによる前方視的調査	
	池田かよ子(2006)	思春期学24(3)	女子小学生、女子中学生	やせ志向、自尊感情(Harterの領域別コンピテンシス尺度)の関連	
	多田賢代(2007)	学校保健研究49(5)	高校生	食物摂取の申告行動の妥当性と不定愁訴の関連	
	八田純子(2008)	健康心理学研究21(1)	女子高校生	摂食障害傾向(EDI)と日常生活に関する評価(基本的な生活特徴と評価、その他の生活時間、学業、余暇活動、生活全般)、身体に関する評価の検討	
	幸田紗弥華(2009)	心理学研究80(2)	女子大学生	ダイエット行動(ダイエット行動尺度)とストレス(ストレス尺度)がBinge Eatingに及ぼす影響	
	加藤佳子(2009)	日本健康教育学会誌17(4)	女子大学生	過食抑制SE(日本語版過食状況効力感尺度)、拒食抑制SEと心理的ストレス反応尺度、痩せ願望、食行動の異常傾向(EAT-26、EDIのBulimia)、甘味に対する態度との関係	
	佐藤由佳利(2010)	心身医学50(4)	高校生	摂食障害傾向(摂食障害症状評価尺度スクリーニング版)と性差の関係	
	矢澤美香子(2010)	女性心身医学15(1)	女子大学生、女子大学院生	完全主義認知(Multidimensional Perfectionism Scaleの自己志向的完全主義下位尺度邦訳版、Multidimensional Perfectionism Cognitive Inventory)とダイエット行動、摂食障害傾向(EAT-26、EDI)の関連	
	SasaiKeiko(2010)	Kobe Journal of Medical Sciences56(6)	女子大学生	無感情症(Toronto Alexithymia Scale)、摂食行動(EAT-26)、自尊心および身体的自尊心(Rosenberg Self Esteem Scale, Body Esteem Scale)の関係	
	山島圭輔(2010)	女性心身医学15(2)	女子大学生、女子専門学校生	自己意識(自己意識尺度)、痩せ願望(全身のふくよかさ不満感尺度)、食行動異常(EAT-26)の関連	
	山島圭輔(2010)	健康心理学研究23(2)	大学生、専門学校生	身体像不満(身体像不満感測定尺度)、食行動異常(食行動異常傾向測定尺度)の関連	
治療(指導)効果	上原徹(2001)	心身医学41(3)	治療患者の家族	摂食障害の家族に対する心理教育的家族教室の効果	
	鈴木健二(2003)	心身医学43(10)	治療患者	過食症に対する集団療法を中心とした教育入院の効果	
	松坂香奈枝(2004)	心身医学44(10)	治療患者	摂食障害に対する主張訓練を中心とした集団認知行動療法の効果	
	ShiinaAkahiro(2005)	Psychiatry and Clinical Neurosciences59(6)	治療患者	過食障害の外來患者に対するグループ療法(認知行動療法と主張訓練法、自尊心発達との併用プログラム)の効果	
	三宅由紀子(2008)	思春期学26(4)	大学生	低体重学生に対するBMI改善のための栄養・食事指導の効果	
スクリーニング	久松由華(2000)	心身医学40(5)	女子大学生	質問紙および診断面接による摂食障害一次スクリーニング法の検討	
	堀田千津子(2004)	教育医学49(4)	女子大学生	摂食障害早期発見のための簡易質問票の作成	
	林弥生(2004)	学校保健研究46(3)	治療患者、女子大学生、女子短期大学生	学生定期健康診断における摂食障害を対象とした一次スクリーニングテストの作成	
	山島圭輔(2005)	女性心身医学10(3)	女子大学生	身体各パーツへの不満感を自己評価および他者評価の側面より測定する尺度の開発	
	HirokaneKazue(2008)	民族衛生74(2)	女子高校生	食行動異常の発現を予測するための一次スクリーニング法の開発	
患者の症状・特性	山根知英子(2000)	子どもの心とからだ9(1)	治療患者(女子小学生、女子中学生)	YG性格テストによる神経性食欠不振症患者の性格特性と予後との関係	
	井上裕之(2003)	医療57(2)	治療患者	摂食障害患者のうつ罹患状況	
	三井知代(2005)	心身医学45(1)	女子大学生	摂食行動障害を有する女子大学生の心理的特性(摂食行動障害の重症度分類(EAT-26)による)、パーソナリティ特性(NEO-FFI)、Rosenberg自尊感情尺度日本語版10項目、アイデンティティ達成感覚(エリクソン心理社会的段階目録検査)、排出行動・むちゃ食いの頻度に関する項目(BITE)の検討	
	中嶋恵利花(2008)	日本アルコール関連問題学会雑誌10	治療患者とその家族	アディクション(アルコール依存、薬物依存、摂食障害)の家族環境(FES日本版)の調査	
	永井美鈴(2005)	学校保健研究47(5)	女子高校生	摂食障害予防教育のためのメンタルヘルス促進授業プログラムの効果	
予防的介入プログラム開発	三井知代(2006)	思春期学24(4)	女子大学生	摂食障害ハイリスクグループへの摂食障害予防介入プログラムの効果	
	草野美穂子(2000)	日本社会精神医学会雑誌9(2)	女子短期大学生	Eating Disorder Inventory-2邦語版の日本における使用の有効性の検討と欧米先行研究結果との比較	
他国との比較	石明英(2001)	心療内科5(6)	女子大学生	台湾と日本の女子大学生の身体像(シルエット画、体型の自覚、理想的な体型を達成する方法、体の満足度、身体部位の満足と不満)についての比較	
	長谷川美津子(2006)	日本心療内科学会誌10(3)	養護教諭	養護教諭の基礎教育背景による摂食障害児童生徒への対応の相違、専門医療機関から養護教諭への支援	

かにし、男子は実際の体格よりも体格に関する不安や精神的不健康さが食行動異常を誘発するとされたのに対し、女子は社会的体格不安が食行動異常に強く関連していた。佐藤ら⁵⁰⁾は、高校生の摂食障害傾向について性差から検討し、女子は「過食経験」「食べることへの心理的負担」と関連し、男子は「やせていることへの周囲からの圧力」が関連していることが明らかになり、ここでも性別による相違が示された。

〈治療（指導）効果〉5件中4件は、医療機関における治療効果を検討するものであった。三宅ら⁴⁷⁾は、大学に在籍する低体重学生にBMI改善を目的とした食事・栄養指導を継続的に実施し、生理学的計測等により効果を検討した。

〈スクリーニング〉5件中2件は学校現場で活用できるスクリーニングの開発を行っていた。堀田ら²⁴⁾は学校において摂食障害の早期発見に役立つ簡便な調査票の作成をするためにEAT-26、BITEを基に19項目の簡易質問票を開発した。林ら²⁶⁾はEAT-26、BITEを基に6項目の質問票と身体検査からなる1次スクリーニングテストを作成した。EAT-26とBITEは世界的に使用される摂食障害スクリーニングテストであるが、合わせて実施すると項目数が多い。項目数を減らし受検する児童生徒等の負担を少なくし、学校において容易に実施できることに重点が置かれていた。

〈患者の症状・特性〉4件中3件は医療機関において把握した患者の症状・特性を報告するものであった。三井³⁰⁾は摂食行動障害を有する女子大学生を対象としており、より明確に特徴を捉えるために医療機関において診断された受診者群と比較検討を行った。

〈予防的介入プログラムの開発〉2件では、摂食障害予防のためのプログラム開発を行っていた。永井ら³⁶⁾

は女子高校生を対象とし、三井⁴¹⁾は体型不満を抱く摂食障害ハイリスクグループと考えられる女子大学生を対象としていた。いずれもプログラムの導入にはメディアが瘦身願望へ与える影響を取り上げており、一方的な講義形式ではなく参加型のプログラムとなっていた。

〈支援者への支援〉では、長谷川ら³⁹⁾は基礎教育基盤の異なる養護教諭に対して専門医療機関から行う支援のあり方を検討した。摂食障害は初発年齢が学童・思春期の難治性疾患であることから、発見や健康管理では学校の養護教諭の役割が重要であり、専門医療機関から養護教諭への教育的支援やケース対応への積極的な相談体制作りが必要であるとした。

2) 質的分析による研究内容（表3）

質的分析による文献10件を研究内容の類似性に基づき分類すると、〈症例報告〉は8件、〈支援〉2件であった。

〈症例報告〉8件のうち、医師によるものが6件、カウンセラーによるものが2件であった。治療経過や特殊な症状を呈した症例について報告されているが、詳細な経過が紹介された報告では、半数以上が小学校から大学までのいずれかの校種に在籍していた。最低年齢は11才（小学生）で、最高年齢は25才であった。就学に関すること（休学、退学、転学、進学など）、学校内の活動（試験、行事、部活動など）、学校内の人間関係（級友、教諭など）という学校に関わる記述が多く見られた。

〈支援〉2件は、摂食障害チーム医療における薬剤師、管理栄養士の役割について各々の専門性を活かした支援について検討を行っていた^{12) 53)}。両文献とも摂食障害の子どもに対するチーム医療を基に、このチーム

表3 対象文献（質的分析、ミックス）

n=11				
内 容	筆頭著者（発表年）	掲載雑誌	論文名	紹介された症例の年齢・性別（所属等）
症 例 報 告	塩川宏郷(2000)	小児の精神と神経40(4)	摂食障害を呈した自閉性障害女児の1例	15歳・女性（中学生→高校生）
	大川貴司(2002)	日本小児科学会雑誌106(7)	Refeeding syndromeによりけいれん重積をきたした神経性食欲不振症の1例	14歳・女性（中学生）
	中村愛(2002)	日本森田療法学会雑誌13(2)	神経性大食症に対する森田療法の有用性	20歳・女性（社会人）
	畔柳園子(2003)	日本森田療法学会雑誌14(2)	森田療法的接近(カウンセリング)による摂食障害の1例	20歳・女性（大学生）
	森田理香(2003)	リハビリテーション心理学研究31(1)	過食を主訴とした女子大学生との動作面接過程	19歳・女性（短期大学生）
	米澤治文(2004)	総合病院精神医学16(2)	神経性大食症患者のクリニカルパスの使用経験	25歳・女性／18歳・女性（高校生）
	小柳憲司(2005)	子どもの心とからだ14(2)	小児神経性食欲不振症の入院治療におけるクリティカル・パス導入の試み	12歳・女性（中学生）／11歳・女性（小学生）／14歳・女性（中学生）／12歳・女性（小学生）
	関谷秀子(2008)	思春期青年期精神医学18(1)	摂食障害の治療 親子分離を目的とする思春期入院治療の一形態	14歳・女性（中学生）
支 援	奥野昌宏(2002)	心身医学42(7)	小児摂食障害チーム医療での薬剤師の役割	14歳・女性／15歳・女性
	寺園沙矢香(2010)	子どもの心とからだ19(2)	摂食障害患者に対する外来栄養相談における管理栄養士の役割	17歳・女性（アルバイト）
〈量〉治療効果 〈質〉症例報告	小野晴久(2003)	精神神経学雑誌105(11)	症状の外在化技法を用いた摂食障害に対する治療効果について	24歳・女性（大学生）／20歳・男性

には在籍学校の担任と養護教諭が含まれ、学校関係者も含めたチーム医療の推進により効果的な治療や適切な支援を進めることができると報告されていた。

V 考察

学校における摂食障害に関する量的分析による文献では、疾患の解明と一次予防、二次予防に重点が置かれた研究が多く見られた。

〈関連要因の探究〉では、摂食障害の関連要因として摂食行動、ダイエット行動、ボディイメージについて検討する文献が多いが、自己概念や自尊感情についても摂食障害との関連が認められた。また、個人の内面に関する要因に留まらず女性誌購読等のメディアの影響、日常行動等生活面に関する要因についても関連が認められ、摂食障害に関連する要因は多岐に亘っていた。そのため、摂食障害の児童生徒等を支援する際には、摂食障害の発症には複雑な要因が関連していることを理解することが重要であり、食事、ダイエット、ボディイメージのみならず精神面や生活面等まで包括的に児童生徒等を捉えて支援していく必要があると考えられる。

次に、一次予防として〈予防的介入プログラムの開発〉では、摂食障害を予防するために保健指導を行い、発症を未然に予防する役割を学校に期待していることが伺われた。永井ら³⁶⁾や三井⁴¹⁾の研究では予防的介入プログラムを学校で実施し効果が認められているが、いずれもメディアが瘦身願望へ与える影響を導入部に用いており、女性にとって関心のある身近な題材であると言える。小澤ら³²⁾の研究では、女性誌などのメディアへの暴露が食行動異常に悪影響を及ぼすことから、食行動異常の予防や治療にはメディア暴露のコントロールが必要であると述べており、このことからメディアリテラシーを指導することの有効性を裏付けていると考えられる。また、葦原ら²⁷⁾は中学生の時点で既に摂食障害を示すものが存在することを明らかにし、摂食障害予防教育は早期に行う必要があると言及している。予防的な介入は中学生や小学生にまで対象を広げる必要があり、それぞれの発達段階に合わせたプログラム開発が求められる。更に、葦原ら²⁷⁾や佐藤ら⁵⁰⁾の研究では、摂食障害に関連する要因について性別による相違が明らかにされており、性別による発生機序を踏まえたプログラム開発も必要であると考えられた。

次に、二次予防について〈スクリーニング〉では、学校現場で活用できるスクリーニングの開発を行っており、学校には治療が必要とされる摂食障害の児童生

徒等が存在することが予想され、そのような児童生徒等を早期発見し治療に結びつける役割を学校に期待していることが推察された。学校保健安全法により定期健康診断の実施が定められており、体重測定は必須項目となっている。しかし、摂食障害は体重測定だけでは必ずしも把握できない症状を呈する可能性があることから、摂食行動等についての調査を合わせて実施することにより早期発見の精度を上げることができると考えられる。

〈支援者への支援〉は、長谷川ら³⁹⁾が学校における摂食障害の児童生徒等の発見や健康管理では養護教諭の役割が重要であることを述べ、専門医療機関から養護教諭への教育的支援やケース対応への積極的な相談体制作りが必要であるとしている。しかし、実際どのような役割を養護教諭が担い、そのために専門医療機関がどのような相談体制作りが必要であるか具体的な内容まで十分に明らかにされているとは言えない。

次に、質的分析による研究では、特に医療機関等における治療に関する文献が多く見られた。

〈症例報告〉では、治療経過において学校に関わる記述が多く見られ、摂食障害の治療にあたっては学校生活への配慮が欠かせないことが伺われた。学校において適切に配慮を行うためには医師やカウンセラー等の専門職との連携が重要だと考えられる。しかし、学校との連携内容や連携の際に生じる課題等についての記述は見られていない。

〈支援〉では、薬剤師と管理栄養士の立場から摂食障害チーム医療に各々の専門性を活かした支援について検討され、このチームには在籍学校の担任と養護教諭が含まれており、学校関係者も含めたチーム医療の推進が効果的な治療や適切な支援に繋がるとした。しかし、学校における摂食障害の児童生徒等への支援の効果については明らかにされていない。

以上のことから、学校における具体的な支援方法については十分に明らかにされていない現状が推察された。今後の課題として学校と専門職との連携を重視した摂食障害の児童生徒等への具体的な支援を提示することが重要になると考えられる。

VI 結論

学校における摂食障害の児童生徒等への支援について研究課題を明確にするために2000年から2010年までの文献を検討し考察を行った結果、以下の結論が得られた。

1. 摂食障害の発症を未然に予防するための保健指導を行う役割が学校に期待されている。

2. 学校には治療が必要とされる摂食障害の児童生徒等が存在することが予想され、そのような児童生徒等を早期発見し、治療に結びつける役割が学校に期待されている。
3. 摂食障害の治療にあたっては学校生活への配慮が欠かせず、学校において適切に配慮するためには医師やカウンセラー等専門職との連携が重要である。
4. 学校における具体的な支援方法については十分に明らかにされていない。学校と専門職との連携を重視した摂食障害の児童生徒等への具体的な支援を提示することが課題である。

文 献

- 1) 保健室利用状況調査委員会：保健室利用状況に関する調査報告書，日本学校保健会，2008
- 2) 日本摂食障害学会：摂食障害治療ガイドライン，医学書院，2012
- 3) 久松由華，坪井康次，筒井末春，篠田知璋．一般女子大学生に対する摂食障害の一次スクリーニング法についての検討．心身医学 2000；40：325-331．
- 4) 山根知英子，村山隆志，大橋雄二，笠原悦夫．神経性食欲不振症における性格特性の検討 小，中学生女子を対象にして．子どもの心とからだ 2000；9：29-35．
- 5) 草野美穂子，額原禎人，中村敬，牛島定信，館哲朗，Joern von Wietersheim．
Eating Disorder Inventory-2の一般女子学生への試行．日本社会精神医学会雑誌 2000；9：171-181．
- 6) 塩川宏郷，桃井真里子．摂食障害を呈した自閉性障害女児の1例．小児の精神と神経 2000；40：297-301
- 7) 木村達志．女子大学生の減量行動と生活習慣及び体脂肪率との関係．学校保健研究 2001；42：496-504．
- 8) 上原徹，川嶋義章，河内博子，田崎紳一，後藤雅博．摂食障害の家族教室 家族の心理状態及び家族機能との関連．心身医学 2001；41：189-197．
- 9) 石明英，久保千春．台湾と日本の女子大学生の身体像についての比較研究．心療内科 2001；5：447-453．
- 10) 石明英，日高三喜夫，久保千春．日本における大学生の身体像に関する性差の検討．心療内科 2001；5：454-460．
- 11) KajitaMiwako, TakahashiToshihiko, HayashiKimiko, FukuharuMichitaro, SatoJuichi, SatoYuzo. 特に痩せた学生における自尊感情と精神的健康の特徴の大学生人格調査票による検討．Psychiatry and Clinical Neurosciences 2002；56：123-129．
- 12) 奥野昌宏，細見光一，前川恵他．小児摂食障害チーム医療での薬剤師の役割．心身医学 2002；42：450-458．
- 13) 大川貴司，藤塚聡，赤木稔，古池雄治，関根勇夫．Refeeding syndromeによりけいれん重積をきたした神経性食欲不振症の1例．日本小児科学会雑誌 2002；106：896-899．
- 14) 中村愛，星野良一，葛西英二，田中純二，河合正好，森則夫．神経性大食症に対する森田療法の有用性．日本森田療法学会雑誌 2002；13：147-153．
- 15) 片山美香，松橋有子．思春期のボディイメージ形成における発達的研究 中学生から大学生までの横断的検討．思春期学 2002；20：480-488．
- 16) 井上裕之，松坂利之，鈴木健二他．摂食障害患者のう蝕罹患状況とその考察．医療 2003；57：100-107．
- 17) NishizawaYoshiko, KidaKazuyuki, NishizawaKatsunori, HashibaShizuka, SaitoKumiko, MitaReizo. 日本の高校生における自己体型認識と食行動．Psychiatry and Clinical Neurosciences 2003；57：189-196．
- 18) 岸川雄介，西田紀子，正木大貴，南里裕美，和田良久，福居顯二．女子高校生のボディイメージに関する実証的研究 摂食態度・自己概念との関係から．心療内科 2003；7：350-354．
- 19) 鈴木健二，武田綾，白倉克之．アディクションモデルによる過食症の入院治療の試み．心身医学 2003；43：689-697．
- 20) 畔柳園子，中村敬．森田療法的接近(カウンセリング)による摂食障害の1例．日本森田療法学会雑誌 2003；14：151-157．
- 21) 森田理香．過食を主訴とした女子大学生との動作面接過程．リハビリテーション心理学研究 2003；31：47-57．
- 22) 小野晴久，小嶋和重，東豊，吉岡伸一，川原隆造．症状の外在化技法を用いた摂食障害に対する治療効果について．精神神経学雑誌 2003；105：1363-1386．
- 23) 葦原摩耶子，中村菜々子，上地広昭，竹中晃二．女子中学生におけるダイエット行動に関するセルフエフィカシー尺度の作成 セルフエフィカシーとダイエット行動のタイプとの関連．日本健康教育学会誌 2003；11：67-76．
- 24) 堀田千津子，高田晴子．摂食障害早期発見のための簡易質問票の妥当性の検討 摂食態度得点の試み．教育医学 2004；49：260-268．
- 25) 米澤治文，斎藤浩，中村研，澤井麻好，古庄立弥，大田垣洋子．【精神科臨床におけるクリニカルパス】神経性大食症患者のクリニカルパスの使用経験．総合病院精神医学 2004；16：113-122．
- 26) 林弥生，小杉正太郎，島津明人，末松弘行．学生定期健康診断における摂食障害を対象とした一次スクリーニングテスト作成の試み 項目の精選と妥当性の検討．学校保健研究 2004；46：254-263．
- 27) 葦原摩耶子，上地広昭，竹中晃二，鈴木英樹．中学生における食行動異常を予測する要因の検討．健康支援

- 2004 ; 6 : 132-136.
- 28) 松坂香奈枝, 富家直明, 内海厚他. 摂食障害に対する集団認知行動療法の効果 主張訓練を中心とした新しい治療法. 心身医学 2004 ; 44 : 763-772.
- 29) 山蔦圭輔, 野村忍. 女子大学生における食行動異常 (第1報). 女性心身医学 2004 ; 9 : 211-218.
- 30) 三井知代. 摂食行動障害を有する女子大学生の心理的特性 パーソナリティ特性, 自尊感情, アイデンティティ達成感覚について. 心身医学 2005 ; 45 : 43-52.
- 31) 小野久美子, 嶋田洋徳. 女子高校生における摂食障害傾向に影響を及ぼす要因の検討. 心身医学 2005 ; 45 : 511-520.
- 32) 小澤夏紀, 富家直明, 宮野秀市, 小山徹平, 川上祐佳里, 坂野雄二. 女性誌への曝露が食行動異常に及ぼす影響. 心身医学 2005 ; 45 : 521-529.
- 33) 山蔦圭輔, 野村忍. 女子大学生における食行動異常 自己意識保有傾向からの検討 (第3報). 女性心身医学 2005 ; 10 : 172-180.
- 34) 山蔦圭輔, 野村忍. 女子大学生における食行動異常 身体像不満足感測定尺度の開発および信頼性・妥当性の検討 (第2報). 女性心身医学 2005 ; 10 : 163-171.
- 35) ShiinaAkihiro, NakazatoMichiko, MitsumoriMakoto 他. 過食障害に対する外来患者グループ療法のオープン試験 認知行動療法と主張訓練法及び自尊心発達との併用プログラム. Psychiatry and Clinical Neurosciences 2005 ; 59 : 690-696.
- 36) 永井美鈴, 青木紀久代, 増田かやの, 岩藤裕美. 女子高校生を対象とした摂食障害予防教育の試み メンタルヘルス促進授業プログラムの効果. 学校保健研究 2005 ; 47 : 436-451.
- 37) 小柳憲司. 小児神経性食欲不振症の入院治療におけるクリティカル・パス導入の試み. 子どもの心とからだ 2005 ; 14 : 116-124.
- 38) 小澤夏紀, 富家直明, 坂野雄二, 福土審. 若年女性における月経前不快気分障害と抑うつおよび過食傾向との関連. 心身医学 2006 ; 46 : 127-136.
- 39) 長谷川美津子, 松崎淳人, 中野弘人, 中野博子. 専門医療機関から基礎教育基盤の異なる養護教諭への支援に関する研究 摂食障害生徒への対応を中心に. 日本心療内科学会誌 2006 ; 10 : 157-161.
- 40) 池田かよ子. 思春期女子のやせ志向と自尊感情との関連. 思春期学 2006 ; 24 : 473-482.
- 41) 三井知代. 女子大学生における摂食障害予防介入プログラムの効果 7ヵ月後までの追跡調査. 思春期学 2006 ; 24 : 581-589.
- 42) 多田賢代, 清板芳子, 平松恵子, 菊永茂司. 高校生の食物摂取の申告の妥当性と不定愁訴との関連. 学校保健研究 2007 ; 49 : 363-372.
- 43) HirokaneKazue, ArakidaMikako. 女子高校生における食行動異常の発現を予測するための一次スクリーニング法. 民族衛生 2008 ; 74 : 55-70.
- 44) 関谷秀子. 摂食障害の治療 親子分離を目的とする思春期入院治療の一形態. 思春期青年期精神医学 2008 ; 18 : 53-62.
- 45) 中嶋恵利花, 小平努, 富澤鉄平, 後藤晴彦, 木村忍. アディクションの家族環境について. 日本アルコール関連問題学会雑誌 2008 ; 10 : 99-104.
- 46) 八田純子, 仁平義明. 摂食障害傾向女子高校生の日常生活および身体に関する評価. 健康心理学研究 2008 ; 21 : 10-20.
- 47) 三宅由紀子, 中川俊子, 瀬山一正. 低体重学生のBMI改善のための栄養・食事指導の効果. 思春期学 2008 ; 26 : 413-420.
- 48) 幸田紗弥華, 菅原健介. 女子大生のダイエット行動とストレスがBinge Eatingに及ぼす影響. 心理学研究 2009 ; 80 : 83-89.
- 49) 加藤佳子. 女子大学生の過食抑制, 拒食抑制に関するセルフ・エフィカシーと食行動の異常傾向との関係. 日本健康教育学会誌 2009 ; 17 : 224-236.
- 50) 佐藤由佳利, 土谷聡子. 高校生の摂食障害傾向 その性差について. 心身医学 2010 ; 50 : 321-326.
- 51) 矢澤美香子, 金築優, 根建金男. 青年期女子における完全主義認知とダイエット行動および摂食障害傾向との関連. 女性心身医学 2010 ; 15 : 154-161.
- 52) SasaiKeiko, TanakaKiwamu, HishimotoAkitoyo. 女子学生における無感情症と摂食行動, 自尊心および身体的自尊心との関係. Kobe Journal of Medical Sciences 2010 ; 56 : E231-E238.
- 53) 寺園沙矢香, 磯部昌憲, 高宮静男. 摂食障害患者に対する外来栄養相談における管理栄養士の役割. 子どもの心とからだ 2010 ; 19 : 153-158.
- 54) 山蔦圭輔. 自己意識および痩せ願望と食行動異常との関連性. 女性心身医学 2010 ; 15 : 221-227.
- 55) 山蔦圭輔. 食行動異常および摂食障害予防のための基礎的研究 身体像不満と食行動異常との関連性. 健康心理学研究 2010 ; 23 : 1-10.